

【国語科】教科提案

つながりを意識して考える力を育む

1. 研究テーマ設定の理由

(1) 学校提案とかがわって

国語科では、「問い続け、学び続ける子どもたち」の姿を、文や文章の内容を追求していく中に見出していく。作品内容を追求する際、子どもたちは、作品中の言葉の意味やはたらき、文と文、言葉と言葉のつながりを考えることになる。感動、共感、反発など、作品に対して、自らの思いや考えを頭の中に巡らせる。そのような経験を積み重ねることで、子どもたちは言葉に着目し、自らの中に言葉を蓄積させ、その言葉を活用していく力を身につけていくであろう。

国語科では昨年度に引き続き、「つながり」をキーワードとして研究を進める。ここで言う「つながり」とは、言葉のつながり、他者とのつながり、学習のつながりととらえてきた。今年度は、学校提案を受け、学習のつながりに重点を置いて研究を進める。学習のつながりとは、単元内で子どもと教師が見通しをもちながら進めていく学習であると考えている。子どもが「知りたい」「読みたい」「伝えたい」と思えるような学習活動を展開していくのである。学習のつながりを子ども自身が意識できるようにしながら、考える力を育みたい。

(2) サブテーマに関わって

学校提案では、サブテーマを「子どもの言葉でつくる授業」としている。国語科における「子どもの言葉」は、「話す・聞く」「書く」「読む」活動にあらわれる。国語科の学習では、音声、文字、動作など、様々な方法の表現活動がおこなわれる。しかし、表現力育成を目標として、研究を進めるのではない。表現力も国語科で育成する要素であるが、本年度重点を置くのは、なぜそのような表現となったのかという思考の流れである。音読であれば、「本文に〇〇と書いているから」と教材文に立ち返る必然性が生まれる。思考を伴った表現活動がおこなえるような授業づくりをする。

さらに、「読みたい」「話したい」「聞きたい」と、学習活動に対する前向きな姿勢もまた、子どもの言葉ととらえている。そのような子どもの言葉が表れるための手立てとして、たとえば、単元に活用を場を位置づけるといった工夫が考えられる。ただし、学習したことをすぐに活用に転じられる場合ばかりではないため、学年や学習の中身に応じて、教師による意図的な学習計画が重要となる。そして、その計画については、当該単元だけでなく、当該学年など長期的にみて、どのような言葉の力を身に付けさせたいかを考えることとなる。また、教材や他者、自己の学びに関わって学びを深めていける展開が、子どもの言葉でつくる授業へとつながると考える。

(3) 国語科でめざす子ども像

互いに認め合う中で表現することを楽しみ、言葉にこだわりをもち、自分らしい言葉が使える子どもを目指す。そのために、以下のような子どもたちの姿を期待している。

①主体的に読もうとする子

主体的に読むとは、進んで本を手にとって読む姿だけでなく、作品を読んで「大事だな」と思う言葉や文章に着目し、そこに立ち止まって問いをもつことである。子どもたち自身が「読みたい」という思いをもって作品に向かい、学びを進めていける子を育てていく。自分自身や生活、経験に引き寄せるなど、主体的に学びに取り組むことにより、学習意欲が継続し、著者の思いに触れることができる。そのことにより自分の言葉が洗練され、想像力が高まっていくものとする。

②関わり合いを大切にできる子

教室が子どもたちの学び合いの場になっているか。子ども同士のつながりがある授業であったか。子どもたちが、友だちの読みについて知り、友だち、教師、教材と関わりながら、自分の読みとのつながりについて考えることができるよう学習を進めていく。発言や振り返りに友だちの名前が出てきたり、どんな学習の流れが元となった考えなのか子どもも教師も分かたりする授業づくりを目指す。

③学びの振り返りができる子

対象、他者との対話において、自分とのつながりを意識し、身につけた表現を駆使し自分の中にもった思いや考えを表現できるようにしていく。自分の認識がどのように変容したかを実感できることが重要である。

2. 国語科学習における「問い続け、学び続ける子どもたち」

低学年	中学年	高学年
<ul style="list-style-type: none"> ・学んだ文字や言葉を使って、文を書いたり話したりしようとする。 ・読書(読み聞かせを含む)を楽しむようにする。 ・教師や友だちの思いや考えを聞こうとする。 ・自分の思いや考えを表現しようとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えの中心に気を付けながら、書いたり話したりして伝えようとする。 ・自分の考えと比べながら、相手の話を聞こうとする。 ・自ら言葉を調べ、語彙を増やそうとする。 	<ul style="list-style-type: none"> ・自分の考えが相手に伝わるように気を付けながら、書いたり話したりしようとする。 ・話を聞いたり、本を読んだり調べたりして、多様な考えに進んで関わろうとする。 ・自分の考えと比べながら相手の考えを聞き、自分の考えを再度振り返ろうとする。

単元を進めていく中で、子どもと教材、子どもと子どもがどうつながっていくかをみとる。ノートやワークシート、発言、授業の振り返り作文、座席表などから、子ども一人一人の思考の流れをみとる。そして、指導のねらいに即して、子どもと子どもの読みをつなげられるような発問や切り返しに生かす。

また、子どもの疑問や考えをみとり、子どもたちが気づいていないことに気づかせていくための教師の働きかけを考えたい。ペアやグループで、どのような話し合いになっていくか予想しておいたり、どのような話を期待したいかを考えたりしておき、ペアやグループへの支援にも生かしたい。

実践例「古典を読んで、あなたは『イイね!』できるかな、できないかな」(5年生実践)

本単元では、「枕草子」を、子どもと古典文学との出会いの場として設定した。「古文は何を言っているか分からないから嫌い」といったイメージではなく、「昔の言葉っておもしろい」という思いをもつことができるよう、古典文学との易しい出会いとなる学習にするよう取り組んだ。清少納言との出会いにおいては百人一首、デジタル教材を、「枕草子」との出会いにおいては、挿絵を導入で扱った。子どもにとって自然な学習展開にするために、前単元とつなげた学習展開にすることで、学習意欲の持続を促した。

「マイ枕草子」を作ることに決めた際、「春夏秋冬以外にも、南紀旅行(宿泊体験)の段を作りたい」という声が挙がった。その後の南紀旅行では、日本一と言われる那智の滝の前で、感じたことを夢中で言葉に書き綴っていた。それらのような姿から、子どもたちと古典「枕草子」との距離が縮まったと言えるのではないだろうか。

○創作に対して「何を書けばいいか分からない」「難しい」「はずかしい」と言って敬遠していた子どもたちが、進んで創作しようとするようになった。

○身近なこと(季節、校外学習)を題材とすることで、全員が意欲的に取り組んだ。

○「マイ枕草子」づくりに楽しんで取り組んだ。書くことが好きではない子どもも楽しむことができた。

○見たことを5・7・5音や文章で表現することを楽しむ姿が見られた。自分の心が動いた景色や一瞬を切り取ることの楽しさを味わっていた。

○「枕草子」の学習漫画を用い、挿絵を導入で使うことは、子どもたちにとってイメージが湧きやすかった。

○「枕草子」で使われている古語、歴史的仮名遣いに興味をもつことができた。

実際の学習過程

時	めあて	主な学習内容	指導目標
(第一單元) 5A句会			
1	句会で遊ぼう	絵本「どうぶつ句会」から春の俳句を読み、句の流れから言葉を予想する。	・表現の仕方に着目することができる。
2	俳句の名人に挑戦！ 小林一茶の俳句を 読もう	「雪とけて□村いっばいの（子どもかな）」の（□）の部分予想して、言葉を考える。 春の言葉を集める。	・春を表す言葉に興味もち、使い方に関心をもつことができる。
3	春の俳句を詠んで、 5A句会！	春の俳句を詠み、互いに読み合う。	・感じたことを文に書き表すことができる。
(第二單元) 古典を讀んで、よみがたの「イイね！」			
1	夏秋冬の「イイね！」 を考えよう	夏秋冬のいいなと思うところを考える。グループで言葉を出し合い、付箋に書き分類する。	◎筆者の意見やテーマに対して、共感する点、共感できない点を見つけながら、昔の人のもの見方や感じ方について知ることができる。
2	清少納言ってどんな人	百人一首から清少納言に出会う。	○古典の文章を音読し、言葉の響きやリズムを味わう。
3	「イイね！」を見つけたら「枕草子」を読もう	「枕草子」で清少納言の季節の感じ方を読む。	
4	自分も「マイ枕草子」の作者になろう	今まで集めてきた春夏秋冬についての「イイね！」について、文章にする。	
5	決定！ベスト・オブ・マイ枕草子	グループで読み合い、グループ賞を選ぶ。選ばれたグループ賞を全員が読み、クラス賞を選ぶ。	

③子どもの感想

・春夏秋冬を考えるのがむずかしかったです。南紀旅行を思い出しました。枕草子を読んで分かった事は、春は明け方の方がいいと分かりました。いつも清少納言さんが空を見ていいと思ったりわるいと思ったりしてたんだなあと思いました。枕草子のいいなあと思った所は、かなしかったことや、うれしかったことが書いていて、きれいな空のことをどう思ったか書いていたところです。

・マイ枕草子を作るのは大変だったけど、この枕草子を見て、とてもやるきになったから、清少なごんという人はすごいなあと思った。とても心にのこった。

・全部、食べ物や自然から出来たもので作りました。友達の枕草子は旬のものがたくさんできてきて、とても春が分かりました。清少納言さんの枕草子は、自然のもので太陽や月があつてとてもいいなと思います。春夏秋冬にはいろんな旬のものや人が作ったのがよく分かりました。またちがう物を作りたいです。

・枕草子を作るのはむずかしかったです。特にむずかしかったのは、文を丸(句点)でしめた後、つないでいくのがむずかしかったです。「春はおだやか」は、人々の目線から書きました。春は人々の気持ちや町や村の気候、夏は人々の思う場所を、秋は人々から思う「秋」のいいところを、冬は新年のことや寒いことを考えながら書きました。南紀草子は、南紀旅行で自分が「イイね！」と思ったところを書きました。ぜひこの本をまた読んでください。

3. 研究の展望

(1) つながりを意識した言語活動

子ども同士のつながり、子どもと教材とのつながりが生まれるような言語活動である必要がある。個の学びを深めるために、子どもたちが「他の子はどう思うのかきいてみたい」「自分の読みをきいてもらいたい」という思いをもつなど、人との関わり合いが自然となるような活動を取り入れる。そのようにして活動することを通して、つながりながら学ぶ良さを、子どもたちが感じられるようになってほしい。自分自身を見つめ直し、自己を変容させることができるようにしたい。教材の魅力を感じ、自らの学びのために教材を読む必然性のある言語活動にする。

(2) “ほんまもん” を活用する

学習者一人ひとりが、その単元の学習に主体的に取り組むようにするためには、学習者の興味・関心や問題

意識をふまえた学習課題を設定し、その学習課題の解決を目指して学習活動を展開することができるように単元を構想する必要がある。

学習課題は、①学習者の学校生活や学習生活の場において、学習課題となりうるもの、②社会の求めるものや国語科の教科目標などに照らして、子どもに興味・関心をもってほしいと思うことから設定することができる。①の場合は、子どもたちにとって最も身近な生活の場のことであるので、興味・関心は高いと考えられる。②の場合は、子どもが興味・関心を持つように出合わせることができるように、学習課題を設定することになる。

そこで、子どもが興味・関心を持つ学習材として、“ほんまもん”を積極的に活用したい。子どもたちが主体的に取り組むような学習となるために、“ほんまもん”(本物)の果たす役割は大きい。“ほんまもん”を活用することで、子どもにとっては「知りたい」「伝えたい」と言った意欲が高まり、学ぶ必然性のある学習となる。自分が選んだこと(本など)や地域教材など身近なものを教材化することで、子どもと学習材との距離が縮まり、子どもたちがより主体的に学ぼうとする姿が見られると考える。ほんまもんに触れ、そのことについて調べたり考えたりすることや、見学や体験を通し、興味関心が高まり、知りたい、調べたい、伝えたいという意欲が喚起される学習となる。

(3) 見通しと振り返りを大切にした授業づくり

ここで言う「見通し」とは、単元全体を見わたし、どのような学習をするのかを、子ども自身が把握することである。そのために、学年に応じて、内容、他者、目的、方法、場面、評価が意識できるような学習展開をおこなっていく。「振り返り」とは、自己の学びが学習前後でどのように更新されたかを意識するためのものである。

国語科の導入段階には、教材との出会いと、言語活動との出会いがある。まず、子どもたちが、教材を自分に引き寄せて主体的に学習を進めていけるように、教材との出会いを工夫する。例えば、「たぬきの糸車」(光村図書一下)であれば、昔話を教室に置いたり読み聞かせをしたり、昔の民家や本物の糸車に触れさせたりする。子どもと作品との距離を縮め、「早くこのお話を読みたい」と思わずにはいられないような導入にすることで、学習への関心意欲は高くなる。さらに、言語活動との出会いを工夫することは、子どもたちの学習意欲を喚起し、持続させるものとなる。ただ「『たぬきの糸車』を暗唱しよう」と言うのではなく、言葉だけで語られた民話を実際にきいて民話の世界を楽しむことで、「自分にもできるかな」「やってみたいな」とこれから展開する学習に対する意欲をもって臨めるようにする必要がある。

また、子どもたちが振り返ることができるように、学びの足跡が見える工夫を大切にする。学習の終わりに書く振り返り作文、単元や授業の始めと終わりの音読を録音して聞き比べる、学習したことを教室に掲示するなど、学びの足跡を残して、自らの学習を振り返り、自己の変容を確かめる手立てを講じる。単元の終わりだけでなく、授業ごとの振り返りを大切にして、子どもが自分の学びをいつでもフィードバックできるようにする。

4. 研究の評価

1つの単元やそれぞれの授業において、発言やノート・ワークシートの記述内容などにより、現状把握、子どもの学びの変容を把握するよう努める。また、授業記録を取り、子どもたちの学びの実際をできる限り詳しく記述する。指導と評価が一体となるように、単元や授業という短期的な成果と課題に加えて、長期的な成果と課題についても把握を行う。方法としては、単元の始めと終わり、学期の始めと終わりに、国語科に対するアンケート調査を行う。さらに、単元における、または年間を通しての着目児を設定し、その子の学びの様相の変化を追い、子どもの生きる学習方法や支援の在り方について探る手立てとする。

(参考文献)鹿毛雅治(2007)「子どもの姿に学ぶ教師—『学ぶ意欲』と『教育的瞬間』—」教育出版

世羅博昭編著(2005)「6年間の国語能力表を生かした国語科の授業づくり」日本標準